

古英詩にみる動詞の「生き生き表現」： 「ベオウルフ」の場合

小林 絢子

現代英語では生き生きとした動作を叙述する際には動詞の現在形よりも現在進行形を使うことが多い。それが英語と他のゲルマン系諸語、例えばドイツ語と異なる特徴の1つであり、進行形は微妙で複雑な意味合いを当該の動作動詞に付け加えることになる、といわれている。Be動詞の時制が過去の場合もその理屈はあてはまる。しかし、現代英語でいう進行形の構文、即ちbe動詞＋現在分詞の形は古英語ではあまりつかわれず、古英語の散文の代表ともいべき「アングロ・サクソン年代記」の中でもおよそ26回使われているのみである。¹「およそ」というのはbeon（又はwesan）＋現在分詞（動詞＋-ende, -inde, -unde）は形容詞的に扱われること（例えばwas tyrwigende 'was exasperating'；原形tirgan）が多かったからであるし、又be動詞と現在分詞の間に副詞（句）が割り込んでしまっ、進行的要素が感じられなくなってしまっている場合もあるからである。（例えば現代英語でいえばHe was at home soon (,) crying bitterly.）従って古英語ではbe動詞プラス現在分詞は進行形でなく拡充形と呼ぶ。

それでは古代の英詩ではどのような形で臨場感溢れる情景を描写していたのであろうか。1つは今述べたような動詞の拡充形を使うことであり、もう1つは動詞の現在形を過去の出来事にも使い、必要とあれば副詞（句）を添えることである。本論文では古英詩の傑作「ベオウルフ」をとりあげて、前半ではその中にある数少ない拡充形を取り扱い、後半では「生き生き描写」が動詞の現在形でなされている、という事実を検討する。

「ベオウルフ」は内容的にも韻律的にも英国の代表的な詩であるばかりでなく、古代人の息吹をつたえる、躍動感に溢れる叙事詩であることを知るために、まずその概要を以下に述べる。

この詩は英国で700年ごろに吟唱された3182行に及ぶ英雄叙事詩で、その写本は900年代のもとのされ、MS Cotton Vitellius A.XVとよばれて大英図書館に所蔵されている。主人公ベオウルフと怪物グレンデル母子の闘い及び後半の老王ベオウルフと竜の死闘が中心の話であるが、いくつかのエピソードも含むので、以下に大筋をおってみる。

初めの50行ほどは序章ともいべきもので、デーン人のシュルド族の王シュルドの生い立ちからその息子ベオウルフ（主人公のベオウルフとは異なる）の即位が語られる。そしてその孫のフロスガールの時代がきて、彼のヘオロト（鹿殿）とよばれる大きな木造の宴会場を建てたところからこの物語の筋は動き出す。

鹿殿で夜毎に宴会をするフロスガール王とその家臣たちに近く湖に住む怪物グレンデルが腹を立て、連夜彼らをおそうようになり、多いときは30人もさらっていったり殺したりする。フロスガール王の嘆きを伝え聞いた隣国イエアト族のベオウルフは勇士十余名を率いてデンマークに来る。王の家臣ウルフガールに会い、鹿殿に案内されて王夫妻に会う。妬んだ臣下ウンヴェルスがベオウルフとブレカとの怨念の残る競泳についての話をさしはさむ。又、王妃ウルフセーオウが酒杯を注ぐ場面もある。600～700行ではグレンデルの来襲、ベオウルフとの闘い、そして、前者が負けて腕をもぎとられて湖に帰っていくさまが朗々とうたわれる。

ベオウルフとグレンデルの死闘の翌朝、フロスガール王夫妻は鹿殿の破風にさらされたグレンデルの腕を見に来て、湖まで足をのぼす。スィーエムンド挿話とフィン人の挿話が入った後、1250行から400行ほどベオウルフとグレンデル母の間の闘いが描かれる。グレンデル母がフロスガール王の最も近い老臣アシュヘレをつかんで湖へと逃走したからである。追いかけたベオウルフと彼女は水の中で激しく闘い、湖底に至る。そこには水

の無い空間があり、ベオウルフはフルンテイングという名刀を見つけてそれでもって彼女に切りかかって倒す。フロスガール王の説教（ヘレモード挿話）が1708行から80行位付け加わっている。

ベオウルフは無事イェアト国に帰り、国王ヒエラーク夫妻に歓迎される。その後スリュス挿話、ヘアゾバルド挿話（フレアワル挿話）などが入るが、ベオウルフはついに伯父であるヒエラークの王位を譲り受ける。

物語の後半は2200行からはじまり、ベオウルフが50年間イェアト国を統治した後のことになる。その頃ある火を吹く竜が同国の財宝を守っていたが、ある時その宝庫が荒らされた。ベオウルフは竜を退治しようと決意する。（隣の強国スウェーデンの王との確執の話などが入る。）ベオウルフは甥のウィーラーフと共に竜のいる宝庫である洞穴へ行く。（ヘアスキュン挿話と烏の森の戦闘挿話が入る。）死闘の後ベオウルフは竜によって倒されるが、竜もその後息絶える。ウィーラーフは宝を取り戻し、ベオウルフの偉業をしのおぶ。3000行以降はベオウルフの葬儀と「ベオウルフの塚」とよばれる土饅頭の構築のこと、ベオウルフへの哀歌で終わる。

このようにこの詩はベオウルフの行動中心の、動きのテンポのはやい物語詩であるが、所々にエピソードがはさまっている。それらも概して戦争や紛争の話である。

このようなアクション性の強い韻文ではbe+現在分詞の形が多用されるかと現代英語の感覚からすると期待されるが、この形はこの詩の中ではたった4回（しかもbe動詞は過去形である）しか見当たらない。そのうち2回は現在分詞が形容詞的である。進行形（拡充形）は冒頭にのべたように年代記などの英語の散文においても使われることが少なく、中英語でもチョーサーの全作品中で30回余りしか使われていなかったのであるから、古英語ではなおさら希少であることを念頭において、その貴重な4例をまず見ていくことにする。

ベオウルフの力強い、素早い行動、各登場人物の言動がいかにも気迫に満ちていても4回しか過去進行形を使わなかったとすれば、他は動詞の単な

る過去形で表されていたのであろうか。でも単なる過去形を重ねて物語を順をおって話していたら、淡々とした描写に終始してしまうのではないだろうか。このような疑問を念頭において論を進めてみる。

その4例の原文（古英語版：F. Klaeber, *Beowulf and the Fight at Finnsburg*,）に現代英語訳7種（A：Alexander訳；B：Chickering 訳；C：Clark-Hall 訳；D：Crossley-Holland 訳；E：Heaney 訳；F：Liuzza訳；G：Raffel訳；）²と和訳7種（1：小川和彦訳； 2：忍足欣四郎訳； 3：苅部恒徳訳； 4：鈴木重威[部分]訳； 5：長埜盛訳； 6：羽染竹一訳； 7：長谷川寛訳）³を配して、そこで過去形のアクション動詞がどのような形にかえられているか、という事を比較検討してみることにする。

159行目

ここはまだ物語の始まりの部分で、語り手である詩人がフロスガール王が父祖以来のデーンの土地を平定し、繁栄に導いて「鹿殿」を建設したことを語る。そしてグレンデルの暴虐ふりとフロスガールの苦境を述べる。詩人はこの怪物は周りの人々と仲良くせず、又、どんな懐柔策にも乗らないと嘆く。

(ac se) æglæca ehtende wæs,
deorc deaæscua, duguþe ond geogoþe,
seomade ond syrede; (159~161)

今回、代表的な和訳として選んだ長埜訳（註3参照）によると、ここは「それどころか、/くらい死の影なるこの怪鬼は、/老若の武者たちを追い求めつつ、/さまよい、待ち伏せするのであった」と詩人が報告している所である。ehtende（原形ehtan 'pursue, persecute'）は現代英語ではpursuingである。この和訳をみると「追い求めつつ」がwæs ehtendeにあたるの

で、seomode（原形seomian 'hover, hang, lie remain'）「さまよった」と syrede（原形syrwan 'to plot, ambush'）「待ち伏せした」という過去形の動詞で表された行動と同時進行的にehtanしたのだから、ここで過去進行形のwas ehtendeを使ったのは現代英語の進行形の使い方と合致しているように見える。しかし、それならば上記の部分を現代英語訳に直訳すると、

(but the) monster, dark and death-shadowed one,
was pursuing, hovered around and ambushed
the young and old

となる。pursueもhoverもambushも動作動詞であり、それらを並べただけなのだから、そのうち1つだけをbe+現在分詞にする意味がない。従って、ここはこの現在分詞は状態をあらわしている、即ち拡充形とみるのがよいであろう。

それではこの部分について上記以外の現代英語訳はどのようになっているのであろうか。上の3つの動詞のうち、どれを単純な過去形にするか、どれを現代でいう進行形にするか、という点からそれらを見てみるとその現代英語訳はかなりまちまちである。仮にehtanを①、seomianを②、syrwanを③とすると①を単純過去形にしているものが殆どといえる。

（現代英語訳中の①のみ下線）

A - the dark death-shadow drove always against them,
old and young; abominable
he watched and waited for them …

C - But the demon, the dark-shadow,
ever pursued young and old, laid in
wait for and entrapped them

D - But the cruel monster constantly terrified

young and old, the dark death-shadow
lurked in ambush

F - for the great ravager relentlessly stalked,
a dark death-shadow, lurked and struck,
old and young alike, …

G - That shadow of death hunted in the darkness,
Stalked Hrothgar's warriors, old
And young, lying in waiting, hidden
In mist, invisibly following them from the edge
Of the marsh …

Gは②や③を進行形にしていて①を単純過去形にしているのだから結局
どの動作動詞を中心にしてそれにぶらさげでどの動詞を生き生きとした同
時進行形の情景描写とするかということを書き手の選択によるといえる。
下記のように①を受身にしてしまう訳者もいるのである。

E - Young and old

were hunted down by that dark death-shadow
who lurked and swooped in long nights.

長埜訳以外の和訳も比較検討してみよう。こららは全て長埜訳より後に
出版されたものであるが、それらは殆ど下記のように「迫害しつづけ」と
いう形をとっている。

- 2 — それどころか、妖怪は、暗き死の影は
古参新参の別なく家臣を迫害しつづけ、
あたりを徘徊しては待ち伏せをし、
3 — そしてその怪物は 迫害し続けた、

暗き死の影は老武者若武者の別なく、
待ち伏せた。

- 6— だがこの怪物、暗い死の影は
武士たちの老若いずれをも迫害しつづけ、
ぶらついては待ち伏せし、
- 7— まして暗い死の影なる怪鬼は、物陰に潜み、
待ち伏せ、若武者、古兵を殺め続け、
沼地を巡れり。

467-469行目

次はグレンデル退治の手助けにきたベオウルフがフロスガール王と初めて会見した場面である。ベオウルフは祖父フレーゼルの刀を王に献上し、王は昔物語を語って聞かせる。自分はハアルウデネの次男だったが、兄の死によって王位についた、と言う。

ða ic furþum weold folce Deniga
ond on geogodheold ginne rice,
hordburh hæleþa; ða wæs Heregar dead,
min ylðra mæg unlifigende,
bearn Healfdenes;

長埜訳は「そのころわたしは、/デンマークの民を治め始めたばかり、/
そして若年ながら、/この大国を、勇士たちの宝庫の都を/領有していたの
だった。/そのころは既に/わが兄君、ヘオロガールは死んでいた。/ハアル
ウデネの子なる兄」である。

ここは動作動詞を同時進行的に述べている場合ではない。unlifigende
はunliving即ちdyingであるが、文脈からいって自分（フロスガー）の兄
が自分の即位時にはすでに亡くなっていた、というのだから、「死につつ

あった」というより「死んでいた」が正しい。

Bはmy older brother (was) no longer aliveと言う形容詞で現代英語訳している。原文のwæs unligendeはwæs dead のwæsと兼ねていてunlivingとdeadは意味的にほとんど同じなのだから古英詩は重複していて冗長である。そこでBは後者のほうをHeorogar had diedと訳して、時間的に古いほうもっていつている。先に和訳をみていると、そのところが重複とわかっていても、

- 1— ヘオロガールは既に亡し、
兄者でありしその人は 久しき前い世を去りぬ、
ヘアルフデネの親王の。
- 2— ヘオロガール殿がみまかり、世を去っておられたのだ。
- 3— 当時ヘレガールが亡くなって . . . 生きてはいなかった。
- 5— わが兄君、ヘオロガールは死んでいた。
ヘアルヴデネの子なる兄君は世になかったのだ。
- 6— ヘアルフデネの子 ヘオロガールは死去し
この世には居ませんでした。

と、忠実に2度死亡事実をのべていることが多い。読む側（聞く側）も重複していてもそんなに気にならない。機械的に進行形の和訳として「死につつあった」をする訳はさすがに見あたらず、重複はせいぜい強調か時間差表現かで置き換えられているだけである。

B以外の現代英語訳もそれぞれ下に見るように工夫して、その二重表現の正当性を訴えているように見える。

A - Heorogar was then dead,
the son of Healfdene had hastened from us,
my elder brother;

C - when Heorogar, my elder brother,
the son of Healfdene, was dead and lifeless,

D - my elder brother,
Heorogar, Healfdene's son, had died
not long before,

E - …Heorogar,
my older brother and the better man,
also a son of Halfdane's had died.

Dはnot long beforeと意識をしているが「もはや生きてはいなくて」という雰囲気を訴えようと死亡の時期に触れたのであろう。Eにいたっては単にhad diedだけでunlivingは全く無視している。Fは文字通り'then Heorogar was dead, my older brother unloving, Healfdene's firstborn'と訳しているが、直訳で固い感じがする。Gのように当該のところを名詞に換えてしまっている訳もある。

G - My older brother … had died
… and dying made me
Second among Healfdene's sons, first
In this nation

単に「死んだ」のではなく、その「不在」が何らかの影響を弟フロスガールに与えた、と強調したいのならGのように訳してよいであろうが、ここは原文は（従って他の現代英語訳も和訳も）フロスガールがデーンの国の第一人者となったことよりも、彼がその後金銀財宝で隣国との争いに決着をつけた、と淡々と話しているところなのであるから何も「生き生き」しないでよいので、強調的重複は必要ないのである。従ってこの拡充系も添え物としての情景描写にすぎないといえる。

第3番目（847行目）の例はエピソードでなく、語り手の地の文の中にある。ベオウルフはグレンデルとの一騎打ちに勝ち、もぎとった片腕を鹿殿の破風の上にさらしておく。それを見物にきた人々はグレンデルが逃げ込んだ湖の方へと急ぐ。湖面は血潮であふれていた。語り手は原文で、

Ðær was on blode brim weallende,
atoll yða geswing eal gemenged,
haton heolfre, georodreore weol; (847~848)

長埜訳では「そこには水が血でたぎり立っていた。/恐ろしい波のうねりが皆乱れあい、/熱い生血で、鬨いの血潮で沸いていた」と生き生きと湖の状態を述べている。「井戸」のwellのもとであるweallanという動詞は（今でもwellは動詞としても使われるが）'surge, boil'「たぎり立つ」という意味の強い動作動詞なので進行形として適当だと思う。しかし、brim 'water'が主語でその前にÐær 'there'があるので文字通り現代英語訳するとThere was water boilingとなり、boiling即ちwellingは現在分詞ととられかねない。又、副詞句のon blode 'with blood'もbe動詞とV - endeの間に割り込んでいるので、尚更、単純な進行形とはみえない。そしてyða 'wave'を主語とする場合は過去分詞のgemenged（原形mengan 'mingle'）をこれ又weallendeの為に使ったbe動詞を利用して並用してくれるのだから、この進行形のインパクトも減ってしまうように思う。即ち、直訳すると'There was water welling with blood, / dire swirl of water (was) all mingled.'となって、「血潮で水がたぎっている」ということと「いまわしい水の渦が（血で）混濁している」ことはやはり重複の感が否めないのである。現代英語訳は当該箇所動詞の単純過去形を使ったものは以下のようになる。

B - There the lake water boiled with blood,

terrible surgings, a murky swirl
of hot dark ooze, deep sword-blood;

D - There the water boiled because of the blood;
the fearful swirling waves reared up,
mingled with hot blood, battle gore;

E - The blood-shot water wallowed and surged,
there were loathsome upthrows and overturnings
of waves and gore and wound-slurry.

しかし前述のように、ここの語り手の文は躍動感があるので、現代英語訳でも進行形にしているものもある。

F - The water was welling with blood there --
the terrible swirling waves, all mingled together
with hot gore, heaved with the blood of battle.

又、形容詞や動詞を折衷して使っている意識もある。

G - The water was bloody, steaming and boiling
In horrible pounding waves, heat
Sucked from his magic veins;

過去拡充形の使われる第4の例は「フィン挿話」(1071～1159行)と呼ばれる記述の中にみられる。ベオウルフがグレンデルとの闘いに勝って、フロースガール王の祝宴に招かれた。王妃ウエアルフセーオウは自分の子供たちを心配してその後見をベオウルフに頼む。フロースガールの側近はデンマークのシュルド族と隣国のフリジア人、そしてフィン族との長年の恩讐を淡々と物語る。

gyf þone Frysna hwylc frecnan spræce
ðæs morþor hetes, myndgiend wære
þonne hit sweordes ecg seðan scolde, -- (1104~1106)

長埜訳は「もしフリジアの何人たりとも/危険な言辞をもって、/あの殺害の憎しみの事に触れるならば/その時は、やいばが裁くことになろうと」のように、if節の中で原形myndgian ('to recollect, to remind') であらわされる意味、つまり「憎しみを心に思い浮かべる」だけでシュルド族はフリジア人を許さない、(とフロスガール王の一族は思っていた、) と述べているのである。ここではフリジア人の心の状態をbe動詞プラス現在分詞(myndgiend) であらわしているわけだから生き生きした表現とか臨場感のある場面とか言いがたい。

その中でも当該の現在分詞myndgiendにやや躍動性をもたせているとみられる現代英語訳はA、E、Gで、以下にみるように、憎しみの感情を日本語でいえば「かきたてる」「よびさます」というような表現であらわしている。

A - but if any Frisian should fetch the feud to mind
and by taunting words awaken the bad blood,
it should be for the sword's edge to settle it then.

E - So if any Frisian stirred up bad blood,
with insinuation or taunts about this
the blade of the sword would arbitrate it.

G - (And he swore that his sword would silence
Wagging tongues if Frisian warriors
Stirred up hatred, brought back the past.

次の訳は同様の感情を「話す」と訳してトーンダウンさせている。

D - and he warned the Frisians that if, in provocation,
they should mention the murderous feud,
the sword's edge should settle things

そして最も一般的なのはmyndgianを文字通り'call to mind, recollect'と訳しているケースである。

B - that if any Frisian, in provocation
should call to mind the murderous feud,
the edge of the sword should settle it for good.

C - And if any of the Frisians should call to mind the blood-feud by
provoking words,
then the edge of the sword should settle it.

F - An if, provoking, any Frisians spoke
reminding them of all their murderous hate,
then with the sword's edge they should settle it.

和訳は冒頭の長埜訳の「言辞をもって（あの憎しみのことに）触れるならば」と言う訳以外はおしなべて2の「殺戮の遺恨を想起こさせるようなことがあるならば」に代表されるような「思い出させる」式の訳となっている。1、6、7の訳がこれにあてはまる。

このように冒頭でのべたように「ベオウルフ」には現代英文法でいう現在進行形はなく、過去進行形もbe動詞の過去形プラス動詞の現在分詞形とといったいわゆる拡充形が少しだけみられるのである。それではこの叙事詩の冒険的な活気というものはどこに見出されるのであろうか。もちろん副詞句や修飾句をふんだんに使うという方法はあるが、文法的にはここで

「生き生き現在」という表現に注目してみたい。これは動詞の現在形を使って過去の出来事を述べ、それによってその事がその場で起きているかのように聴衆または読み手に感じさせるものである。「ベオウルフ」ではその表現方法は使われているのだろうか。

一般に動詞の現在形は次の場合に使われる。①同時進行的な記述や語りをする時、②過去のことをあたかも現在おきているかのように表す時、③繰り返しの行為を表す時、④（近接）未来を述べる時、⑤一般的真理を述べる時、である。このうち①、②、③の用法が「生き生き表現」と関係がある。①について、中英語（Middle English = ME）の研究者Mustanojaは中英語では進行形（拡充形）よりも単純現在形であらわされることが多かった、と言っている。⁴古英語である「ベオウルフ」でもそのようなケースが多い。例えば590行目、ベオウルフがウンヴェルスUnferthの妬み深い暴露話に反論する場面であるが、そこでは“Secge ic to soðe”といて自分の主張を言い始める。現代英語訳では“I tell you truly”（D）；“In truth I tell thee”（C）；“It speaks for itself”（A）となっている。未来形を使っている訳文は“I’ll tell you a truth”（B）；“I’ll say it truly”（F）があるが、ここは、会話文なら現代英語では“I’m truly saying it to you”とか“I’m telling you the truth”など進行形になってもよい所なのでwillを使うと少し固い表現になってしまうのではないと思われる。又、2795行目で瀕死のベオウルフは甥のウィーラーフに次の台詞ではじまる遺言を残す。

2795 - Wuldurcyninge wordum secge,
ecum Dryhtne, þic her on starie
þæs ðe ic moste minum leodum
ær swyltdæge swylc grystrynan.

（長埜訳：わたしは今ここに見る宝の故に、/万物の主、栄光の王、永遠なる神様に/言葉もて感謝を申し上げるのである。/なぜならば、わたしは

死ぬる日の前に、/わが民の為にかかる財宝をば/かち得ることを許されたからである。)

この場面は格調高い言葉がふさわしいので現在形でよいであろうが、やはり同時進行的に意思を述べているのであるから、現代英語ならば進行形がよりよいであろう。

それに比べて2041行目の*cwið*、2046行目の*acwyð*はヘアズバルド又はフレアーワル挿話というエピソードのなかでヘアズバルドについての不満が何度も述べられている所なのでこの現在形は「繰り返し」又は「習慣的」現在形に属するのではないだろうか。

上のような判断をする場合、その動詞に関連する副詞句が大事であることは言うまでもない。*nu*とか*lenge*などがあれば当然そのことはその時点で、あるいは前後で長く、続いているのであろう。しかしこの詩では*nu*を使って進行性をうかがわせる場合は3つ（1343行、2902行、2903行）、*lengswawel*を使っているのは1854行のみである。

②のケースのように現在形が「その時点でまさに行われている」ことを示す場合、その動詞は動作動詞（行為動詞）でも状態動詞でもありうる。「ベオウルフ」にはそのような動詞は40個以上あり、最も多いのは*verbs of knowing*とよばれるものである。例としては*wene*（原形*wenan*：272、383、525、2522、2923）、*wat*（原形*witan*：272、274、1331、1830、2656）、*cunnon*（162、1355、1377、2062）、*talige*（原形*talian* 'suppose, consider'；532、1845、2067）などである。

次に*have*動詞も同様の使われ方が多い。*deah*（原形*dugan* 'avail' 369）、*warigeað*（原形*warian* 'occupy, guard' 1358）、*leofað*（原形*libban* 'live' 1366）、*havo*（原形*habban* 'have' 2150、3000；*hafast* 1174、1849）などである。動作動詞で現代英語なら進行形のほうが適しているとおもわれるのにここでは単純形になっている動詞は*nymð*（原形*niman* 'take' 598）、*wigeð*（原形*wegan* 'carry, wear' 599）、*swefeð*（原形*swebban* 'put to sleep, kill' 600）、*astigeð*（原形*astigan* 'ascend, arise' 1373）、*reotað*

(原形 *reotan* 'weep' 1376)、*gehate* (原形 *gehatan* 'vow, threaten' 1671) などである。これらは主として主節にあらわれるものであるが、従属節にも語尾活用は異なってもしばしば使われている。(289、1174、1654、1701、2252、2253、2795、2864行など)そして、現在行われている事実をあらわす単純形が関係代名詞節に現れている例も多い。(163、414、490、492、1223、1374、1375、1378、1396、3000、3167行など)。

現代英語では進行形が使われてもよいケースをもう1つ挙げる。

Donne sægdon *þæt*… /…*he þritiges manna / mægencreaft on his mundgripe / heaporof hæbbe.* (377 - 381) という所である。ここはFでは 'Seafarers, in truth, have said to me , … / that he has thirty / men's strength, strong in battle in his handgrip.' となっている。この現代英語訳では *sægdon* は現在完了形にしてあるので30人力を今もって持っているように述べたわけだから回想として述べてはいても現在もその影響が続いているといえる。Cは *sægdon* を 'used to say' と現代英語訳しているので、過去の習慣というわけで *hæbbe* は②となるであろう。

現在に全く影響を与えていなくても過去の出来事を生き生き述べたくて現在形を使うというケースを「ベオウルフ」で見してみよう。Visserは「語り手が色々な出来事の流れの中にその事をのせる」ために現在形を従属節の中で使うこともあると言っている。⁵そのケースは3例である。

1 …*Wæs se gryre læsse / efne swa micle, swa bið mægþa, craeft, / wig-gryre wifes be wæpned men , / þonne heoru bunden, hammer geþruen, / sweord swate fah , swin ofer helme / ecgum dyhtig and weard scireð.* (1282 - 1286)

'The fear was less by just so much as women's strength, a women's war-terror, is, as caused by a man, when the ornamented, hammer-forged blade, the blood-stained sword, trusty of edge cleaves through

the boar-image on the helmet of the foe.

2 De ic on morgene gefrægn mæg oðerne / billes ecgum on bonan
stælan, / þær Ongenþeow Eofore niosað; (2484 - 2486)

'Then, at morn, as I have been told, / one brother avenged the other
on / the slayer with the edge of the sword, where / Ongentheow met
with Eofor;'

3 …seah on enta geweord, / hu ða stanbugan stapulum fæste / ece
eorðreced innan healde. (2717 - 2719)

' -- how the ageless earth-dwelling contained within it vaulted
arches, firm on columns.

③の習慣的動作のための現在形 (habitual present) は、「繰り返しの
現在形」ともよばれ、現代英語ではしばしば進行形であらわされる。その
ような習慣性を表したいときは古英詩では gehwam などに伴う副詞句ある
いは節が使われる。「ベオウルフ」のヘアゾバルド挿話の中の以下の2節が
その例である。

…ond þæt ræd talað,
þæt he mid þy wife wælfæhða dæl,
sæcca gesette. (2027 - 2029)

C - … he counts it good policy -- that he should / settle many deadly
feuds and quarrels, through that woman.

Mæg þæs þonne ofþyncan ðeodne Heaðo-Beardna
ond þegna gehwam þara leoda

þonne he mid fæmnan on flettgæð: (2032-2035)

この箇所はCは概略の訳なのでFの訳をみると

It may, perhaps, displease the Heathobards' prince,
and every retainer among his tribe,
when across the floor, following that woman, goes
a noble son of the Danes, received with honors ;

和訳を2例あげると次のようになっている。

2 — ヘアゾバルド人の君主がかの女性を伴って
館にお越しある時、当の君主と国民の従士の各々とは、
不興を覚えることでありましょう。

5 — ですから、ヘアゾバルド人らの君が
姫を伴って楼に入場するときは、
デンマーク人らの公達らが、殿方らが、
もてなされているさまに、
かの君もその民の武臣の面々もみな、
不快な感じになるやも知れません。

ここは、ヘアゾバルド人とデーン人の間の友好のために後者の王フロスガールの娘を前者に嫁がせた場面である。両者はあまりに敵対しているので、ヘアゾバルドの王子がデーン人の姫をともなって当然のように歩いていくことは家臣には不愉快だったろう、と述べているのである。副詞節がなくても文脈から、あるいは過去の出来事から「こういうことをやったもので」とある程度の習慣性が推察される。

最後にもう1つの例を引いてみる。

Ðonne cwið æt beore se ðe beah gesyð,

eald æscwiga, se ðe eall geman,
garcwealm gumena -- him bið grim sefa -- ,
onginneð geormormod geongum ceman
þurh hreðra gehygd higas cunnian
wigbealu wæccan, ond þæt word 2041 - 2045

F - Then an old spear-bearer speaks over his beer,
who sees that ring-hilt and remembers all
the spear-deaths of man -- his spirit is grim --
begins, sad-minded, to test the mettle
of a young thane with his innermost thoughts,
to awaken war, and says these words.

このほか引用する余地はないがヘアゾバルド挿話には2054、2055、2057行にこの形式の叙述が見られる。又、息子を亡くしたフレイゼルの嘆きの中にも同様の用法がみられる。(2446、2455、2457、2460行など。)

以上、「ベオウルフ」における動詞の現在形の描写がいかにも「生き生き表現」効果をもつかということをも①、②、③のそれぞれのケース別に現代英語訳と和訳を使って見てきたわけであるが、その他のケース即ち④と⑤のうち、⑤は叙事詩のなかでは少ないのでは、ということで割愛するとして、④のほうは付随的にみておくことにする。

古英語ではsculanやwillanが未来をあらわす助動詞ではなかったので現在形が未来を表した。副詞(句)からその未来性は明らかで、例えばno þy leng leofað laðgeteona / synnum geswenced (現代英語筆者訳) 'no longer the loathsome destroyer (will) live rotten with sin' (974-975) はno þy lengを使うことによって次のleofaðが現在形でも未来をあらわすことが充分理解できる。「ベオウルフ」には近未来を指していると思われる現在形は主節に限っても58あるが、そのうちの半数以上は伴っている副詞句からその未来性がうかがわれるものである。しかし逆に言えば残りの

半数は文脈からその未来性を察する、ということになる。例えば *Dæt ys sio fæhðo ond se feondschiþe, / wælnið wera, ðæs ic men hafo, / 'þe us seceað to Sweona leoda '* (2999 - 3001) という箇所では *seceað* (原形 *secan* 'seek', try to get' の3人称複数現在形) をFでは現在形に訳してある (That is the feud and the fierce enmity, / savage hatred among men, that I expect now, / when the Swedish people seek us out) しかし、Cでは未来形に訳してある。(This is the feud and enmity, the deadly hatred of men, according to which the people of the Swedes will attack us.)

ベオウルフが竜と戦って死んだ後、甥のウィーラーフがイエーアト族の将来を心配して語ることばの中の一節であるが、ここではスウェーデン人が戦いをしかけてくることをあたかもわかりきったことであるかのように現在形で効果的に述べている。

それから、時制の一致という文法に関することであるが、過去の出来事のをべているのに現在形の動詞を使ったり、主節の動詞が過去形なのにその中の関係詞節や従属節に現在形がつかわれることはしばしばある。例えば会話などで “I saw John who hates me” と言えば時の一致の法則には違反していてもジョンがいつも私を嫌っていることと私が彼を見かけたことの両方が伝わる。日本語でも、例えば「修学旅行の生徒たちはバスを駆け下り、売店に駆け込んだ。おみやげのグッズを取り囲む。ポケモンの財布を奪い合う。」といえは「取り囲んだ」「奪い合った」よりワクワク感があり、文が生き生きしてくる。また、「受験勉強をしている息子の背中が丸くみえた。そっとコーヒーを机の端におく」と書けば、「おいた」よりも臨場感がある。

また、関係詞節、副詞節、名詞節の中の生き生き表現の時制についてはもっとよく考察してみなければならない。

このように現在形を使っての「生き生き」描写にはそれに関連する多くの統辞上の要素があって、それらを上手に組み合わせて使ってこそ迫力のある叙事詩を朗唱できるのである。古代英詩の吟唱者は拡充形を殆ど使わ

ず、過去のことを過去形はもちろん現在形であらわして、適切な副詞（句）で躍動感や習慣的動作を表した。加えて文脈全体あるいは声の強弱、抑揚、韻律など可能な限りのテクニックを使って自分の意とするところを聴衆に伝えたと考えられるのである。

注：

- 1 Scheffer, J. *The Progressive in English*, North-Holland, 1975, pp. 146-7. “was tyrwigende” については同書p.147参照
- 2 Old English Version: Klaeber, FR, *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, D.C.Heath and Company, Massachusetts, 1950.
A : Alexander, Michael, *Beowulf*, A Verse Translation, Penguin Classic, PenguinBooks, 2003.
B : Chickering, Jr., Howell D., *Beowulf*, A Dual-Language Edition, Anchor Books, A Division of Random House, New York, 2006.
C : Clark-Hall, John R., *Beowulf and the Finnesburg Fragment*, George Allen and Unwin Ltd., 1972.
D : Crossley-Holland, Kevin, *Beowulf*, Oxford World’ s Classics, Oxford University Press.
E : Heaney, Seamus, *Beowulf*, A New Verse Translation, Bilingual Edition, W.W. Norton and Company, New York, London, 1999.
同書はDaniel Donoghueによる編纂版もある（A Norton Critical Edition, 2002）ので適宜参照した。
F : Luizza, R.M., *Beowulf*, A New Verse Translation, Broadview Literary Texts, 1999.
G : Raffel, Burton, *Beowulf*, Signet Classics, New American Library, New York, 2008.
- 3 1 : 小川和彦訳「ベオウルフ」武蔵野書房、1993年

- 2 : 忍足欣四郎訳「ベオウルフ」岩波文庫、1991年
 - 3 : 荻部恒徳・小山良一訳「ベオウルフ」対訳版、研究社、2003年
 - 4 : 鈴木重威訳「古代英詩：ベオウルフ」部分訳、研究社、1972年
 - 5 : 長埜盛訳「ベオウルフ：附・フィンネスブルグ争乱断章」吾妻書房、1975年
 - 6 : 羽染竹一訳「古英詩大観」原書房、1992年
 - 7 : 長谷川寛訳「原典対照ベオウルフ読解」春風社、2010年
 - 8 : 吉見昭憲「古英語詩を読む：ルーン詩からベオウルフへ」春風社、2008年
- 4 Mustanoja, Tauno, *Middle English Syntax, Part I*, Societe Neophilologique, Helsinki, 1960, pp.482-3現代英文法では動詞の現在形と過去形にそれぞれ「進行相」と「完了相」を認めるというような分類法（R.クワークとS.グリーンバウム著、「現代英語文法」池上嘉彦訳、紀伊国屋書店、1977年、pp.57～69）もあるが、ここでは伝統的な分類に従っている。
- 5 Visser, F.Th., *An Historical Syntax of the English Language*, Vol. 2, Brill, Leiden, 1963～73. “The present tense occurs in subordinate clauses, so that what they refer to is not to be seen as a detached item in the stream of happenings recounted by the narrator.”